

中国の随葬衣物疏における用語と表現

——仏教語の検討を中心として——

浅見
直一郎

はじめに	三
第一章 本稿で取り上げる随葬衣物疏	四
(1) トルファンの随葬衣物疏	五
(2) 中国内地の随葬衣物疏	九
第二章 随葬衣物疏に現れた仏教語	三三
(1) 郁超と「奉法要」	三三
(2) 五戒	一六
(3) 十善	一七
(4) 五道	一八
(5) 歳三月六の斎	一九
(6) 中国撰述經典	二〇
第三章 随葬衣物疏の諸表現	二二
(1) 醉酒	二三
(2) 仏と花を取る	二三
(3) 書ける者と読める者	二九
第四章 仏教語をもつ墓券	三三
おわりに	三七

はじめに

筆者はこれまで、中国の随葬衣物疏、特にその付加文言を主題とする論考をいくつか発表してきた。⁽¹⁾ 本稿はその続編として、旧稿では十分に扱えなかった問題と、最近新たに得られた考察すべきいくつかの資料について、検討を加えることとする。

随葬衣物疏とは、死者の埋葬にあたって墓中に納められる副葬品のリストであるが、しばしばリストに加えて、死後の安寧を願う何らかの文言が付加されることがある。この付加文言には、他の史料ではうかがい知れない、当時の人々の世界観や死生観が反映されており、筆者が研究対象としてきた理由もそこにある。

古くは漢代の遺策（副葬品を列挙した竹簡・木簡）に淵源する随葬衣物疏であるが、六世紀ごろを境として、付加文言の中に仏教語が現れるようになる。これは、中国の社会に仏教が浸透し、習俗の中に根づいていったことを反映していると考えられる。しかし、旧稿では、それらの仏教語がどのような文献に現れ、いかなる意味をもつものであるのか、その具体的な検討を十分に行なうことができなかった。そこで本稿の第二章では、随葬衣物疏に登場する仏教語について、仏教文献を参照しながら具体的な検討を加えることとする。

ところで、葬送文書としてやはり古い起源をもつものとして「墓券」（買地券）がある。「買地券」という名称の通り土地売買文書の形式をとり、被葬者が土地の神から墓の土地を購入したという内容をもち、地下の生活空間（墓）における死者の安寧な生活を保障しようとしたものである。もちろん現実の土地売買文書とは異なるの

で、特に区別して「墓券」と呼び、本稿でもその名称を用いる。ただ、中国では現在でも「買地券」という語を使うのが一般的である。

筆者は、随葬衣物疏との対比において墓券を取り上げ、随葬衣物疏には仏教語が現れるようになるのに対して、墓券には全く仏教語が登場しないことから、中国における仏教の浸透のしかたについて論じたことがあった。近年この墓券を対象とした研究として、魯西奇『中国古代買地券研究』（廈門大学出版社 二〇一四）が出版された。これは中国における墓券を集大成した大冊であるが、の中には、筆者が、仏教的要素をもたないと述べてきた墓券の中に、ごく例外的にはあるが、仏教語を持つものがあることが紹介されている。また、本書に収められた墓券と対照することで、随葬衣物疏に現れる用語・表現について新たな知見を得られたものもある。そこで本章の第三章では墓券を手がかりに随葬衣物疏の用語・表現を考察し、第四章では仏教語をもつ墓券を対象とした初歩的な検討を行なうこととした。

なお、第一章では本稿で検討の対象とする典型的な随葬衣物疏を紹介するが、これらは旧稿でも取り上げたものである。したがって、この部分の叙述には旧稿と重複するところがあるが、行論の都合上必要であるので、ご諒解をお願いしたい。

第一章 本稿で取り上げる随葬衣物疏

本章では、本稿で考察の対象とする六点の随葬衣物疏を提示し、訓読と簡単な解説を加える。なお、随葬衣物

疏と墓券を提示する際には、【衣一】、【衣二】、【衣三】……、および【墓一】、【墓二】、【墓三】……、のように通し番号を付し、原文と訓読文とを示す。名称の下に（全文）と注記した場合はその全文（随葬衣物疏の場合は付加文言の全文）で、原文の改行は原史料の通りである。また（抄出）とある場合、同一の墓券から異なる箇所を抄出したときでも、別の番号を付してある。

(1) トルファンの随葬衣物疏

随葬衣物疏が最も多く発見されているのは、新疆ウイグル自治区トルファン盆地の漢人墓群であつて、従来約六十例が知られていたが、最近では榮新江・李肖・孟憲実主編『新獲吐魯番出土文獻』（中華書局 二〇〇八）に六例が収められており、今後が増える可能性がある。また、その多くが付加文言をもつものであることも注意される。ここでは、その中からタイプの異なるものを三例取り上げる。

【衣一】北涼 緣禾六年（四三七）翟万随葬衣物疏（全文）²

緣禾六年正月十四日、延寿里民翟万去天

入地。謹条隨身衣裳物数如右。時見左

清龍、右白虎、前朱雀、後玄武。

田並条。

縁禾六年正月十四日、延寿里の民翟万、天を去り地に入る。

謹しんで随身の衣裳物数を条すること右の如し。

時見は左清龍・右白虎・前朱雀・後玄武なり。

田並条す。

縁禾という年号は、かつては未詳とされていたが、現在では北涼で使用されたものであることが判明しており、この衣物疏の年代も確定された。日付に次いで「延寿里の民である翟万が、天を去って地に入る」とあり、この翟万が被葬者である。「謹しんで随身の衣裳物数を条すること右の如し」、これは付加文言の前に置かれた九行に及ぶリストを指している。時見すなわち立会人は「左に清（＝青）龍・右に白虎・前に朱雀・後に玄武」である。最後に田並という人物が条列したことを記す。

【衣二】北涼 真興七年（四二三）隗儀容随葬衣物疏（全文）³⁾

真興七年六月廿四日、高「」

郷延寿里民宋泮故妻隗儀容「」。

謹条随身衣物数、人不得勿名「」。

辛関津河梁不得留難。如律令。

真興七年六月廿四日、高「」郷延寿里民宋泮の故妻隗儀容「」。

謹しんで隨身衣物数を条す。人は初名「」するを得ざれ。

辛(Ⅱ幸) わくは関津河梁の留難するを得ざらんことを。

如律令。

日付に次いで記される「高(昌?)」某郷延寿里の民、宋泮の物故した妻、隗儀容」が被葬者であろう。以下「謹んで隨身の衣物数を条(列)」し、「(他)人は初名(奪い取る意か)」してはならない、と続くが、注目すべきは最後の「辛(Ⅱ幸) わくは、関津河梁は留難するを得ざらんことを。律令の如くせよ」という部分である。これは通行手形によく現れる表現で、津は渡し場、梁は橋であるが、要するに関津河梁とは、そのような場所に設置された関所を言い、留難とは留めて通行を許さないことであるから、全体としては関所に対して旅行者を円滑に通行させるよう要請しているのである。このような通行手形の要素は、前漢初期の遺策において見られ、その後いったん姿を消すが、ここで再び登場し、次の時期に受け継がれていくのである。

【衣三】 魏氏高昌国 延昌三十六年(五九六) 某甲随葬衣物疏(全文)⁽⁴⁾

延昌卅六年丙辰歲三月廿四日、大德比丘

某甲敬移五道大神。仏弟子某甲、持仏五戒、

専修十善、宜向遐齡、永賜難老、但昊天

不弔、以此月十九日忽然徂殞、逕涉五道。幸

勿呵留、任意聽過。請書張堅固、時見

李定度。若欲求海東頭、若欲覓海西

壁、不得留停。急々如律令。

延昌卅六年丙辰歲三月廿四日、大徳の比丘某甲、敬しみて五道大神に移す。

仏弟子の某甲、仏の五戒を持し、専ら十善を修む。

宜しく遐齡を向け、永く難老を賜るべし。

但だ昊天は弔れまず、此の月の十九日を以て忽然と徂殞し、五道を逕渉す。

幸わくは呵留すること勿く、任意に過ぐるを聴されよ。

請書は張堅固、時見は李定度なり。

若し海東の頭を求めんと欲し、若しくは海西の壁を覓めんと欲するも、留停するを得ざれ。

急々如律令。

これは麴氏高昌国時代の典型的な衣物疏である。日付の後「大徳の比丘の某甲が敬しんで五道大神に移す」と始まるが、移は公文書の書式の一つで、統轄・被統轄の關係にない者の間で用いられる。この場合、発信者は大徳の比丘の某甲、受信者は五道大神である。大徳の比丘は實際の名を記すことが少なく、他の例によく登場する

のは果願（願いを果たす意）という架空の名である。五道は仏教語で衆生輪廻の場、五道大神は輪廻をつかさどる神である（第二章参照）。つまり、この衣物疏は現世の大徳の比丘から輪廻をつかさどる五道大神へ送られた文書の形式をとっており、両者の間には統轄・被統轄の関係がないと意識されていたことがわかる。

続く「仏弟子の某甲」が被葬者であるが、やはり固有の名は書かれていない。この人は「仏の五戒を持し、専ら十善を修め」て仏教を篤く信仰したので「宜しく遐齡を向（＝享）け、永く老い難きを賜つ」て長生きをすべきであったが、しかし「昊天は弔（あわ）れまず、此の月十九日を以て忽然と徂殞し、五道に逕渉」することになったので、「幸わくは呵留することなく、任意に過ぎるを聴（ゆる）されたい」と述べて、五道をわたる被葬者の通行を保障するように要請する。請書（文書の作成者）の張堅固と時見（立会人）の李定度は、墓券にもしばしば登場する神仙である。最後に「若し海東の頭（ほり）を求めんと欲し、若しくは海西の壁（もと）を覓（もと）めんと欲するも」、すなわち世界の果てまで行きたいと願ったとしても、留停してはならない、と付け加え、「急々如律令」と結ぶ。

(2) 中国内地の随葬衣物疏

【衣四】東晉 升平五年（二六二） 潘氏随葬衣物疏（全文）⁽⁵⁾

升平五年六月丙寅朔、廿九日甲午、不祿。公国典衛

令、荊州長沙郡臨湘県都郷吉陽里周芳命

妻潘氏、年五十八、以即日醉酒不祿。其随

身衣物、皆潘生存所服飾、他人不得忘

認証債。東海童子書。一（書）迄還海去。

如律令。

升平五年六月丙寅朔、廿九日甲午、不祿す。

公国典衛令、荊州長沙郡臨湘縣都郷吉陽里の周芳命の妻潘氏、年五十八、即日を以て醉酒して不祿す。

其の随身の衣物は、皆潘の生存に服飾する所なり、他人は忘認証債するを得ず。

東海童子書く。書き迄りて海に還りて去る。

如律令。

日付の次の「不祿」とは、士の身分にある者の死を言う。次いで被葬者の夫の官職、本貫地、姓名を記し、その妻の潘氏が五十八歳で亡くなったことを述べる。醉酒という表現については第三章で検討を加える。続いて、その随身の衣物はすべて故人が生前に身に着けていたもので、他の人が横取りしてはならない、と言い、最後に、この衣物疏を書いたのが東海童子という神仙であって、書き終えたら海に帰っていく、と述べる。この点についても第三章で検討する。最後は「如律令」という呪文で結ぶ。

【衣五】東晋 永和八年（三五二） 雷陔妻随葬衣物疏（全文）⁽⁶⁾

永和八年七月戊子朔、五日壬辰、江州鄱陽郡鄱陽縣都□□□□□□□□

南昌令雷陔命婦鄱陽□漲耦、年八十六、即醉酒□□□□□□

身衣物疏、如女青詔書、不得志者。

永和八年七月戊子朔、五日壬辰、江州鄱陽郡鄱陽縣都□□□□□□南昌令雷陔の命婦鄱陽□漲耦、年八十六、即
ち醉酒□□□□□□身衣物疏、女青詔書の如く、志すを得ず。

【衣五】は判読できない文字が多いが、その内容が【衣四】に酷似していることは間違いない。「命婦」とは大
夫・士の身分にある者の妻を言う。女青は神仙である。最後の「不得志者」とは、やはり（他人が）横取りして
はならないという意味であろう。

【衣六】北齊 武平四年（五七三） 王江妃随葬衣物疏（全文）⁽⁷⁾

因齊武平四年歲次癸巳七月乙丑朔六日庚午、釈迦文仏弟子高僑敢告

灇湾里地振坦国土。高僑元出冀州勃海郡、因宦仍居青州齊郡益都県灇

園里。其妻王江妃、年七十七、遇患積稔、医療無損、忽以今月六日命過壽終、

上辞三光、下歸蒿里。江妃生時十善持心、五戒堅志、歲三月六、齋戒不闕。今為戒

師・藏公・山公等所使、与仏取花、往如不返。江妃命終之時、天帝抱花、候迎精神、大權

□□、接待靈魂、勅汝地下女青詔書・五道大神・司□之官、江妃所齋衣資雜物・随

身之具、所逕之处、不得訶留。若有留詰、沙訶楼陀碎汝身首如阿梨樹枝。来時忽々、不知書読是誰。書者觀世音、読者維摩大士。故移。即即。

因齊武平四年歲次癸巳七月乙丑朔六日庚午、釈迦文仏の弟子高橋、敢えて漚湾里の地の振坦国土に告ぐ。

高橋は元と冀州勃海郡に出で、宦に因りて仍お青州齊郡益都県漚湾里に居る。

其の妻王江妃、年七十七、患に遇いて稔を積み、医療は損なうこと無きも、忽ち今月六日を以て命過ぎ寿終わり、上三光に辞し、下蒿里に歸す。

江妃は生時、十善もて心を持し、五戒もて志を堅くし、歳三月六、斎戒して闕かさず。

今、戒師・藏公・山公等の使用する所と為り、仏と花を取り、往きて返らず。

江妃命終わるの時、天帝は花を抱きて精神を候迎し、大権は□□して靈魂を接待し、汝地下の女青詔書・五道大神・司□之官に勅すらく、江妃齋らす所の衣資雜物・隨身之具は、所逕之处、訶留するを得ざれ。若し留詰する有らば、沙訶楼陀の汝の身首を碎くこと、阿梨樹の枝の如くせん。

来時忽々として、書き読めるの誰なるを知らざるか。書けるは觀世音、読めるは維摩大士なり。

故に移す。

即即。

【衣六】は【衣三】とほぼ同時期のものであるが、地域は遠く離れた山東省で発見されたものである。この長

文の衣物疏については、かつて逐語的な解釈を試みたことがあるので詳細はそちらに譲り、ここではおもな特徴を箇条書きにするにとどめる。

一、現世の者から冥界への通知であること。釈迦文仏の弟子である高橋（被葬者の夫）が、居住地である澗湾里の地の振坦（＝震旦）国土に呼びかけている。

二、通行手形の形式に沿っている箇所があること。被葬者の王江妃が冥界へ向かうので、その通行を妨害しないよう要請している。

三、仏教的要素を多く含むこと。王江妃が生前仏教の徳目をきちんと守っていたことを述べるほか、夫の高橋は釈迦文仏の弟子と称していること、五道大神が登場すること、この衣物疏の書き手が観世音、読み手が維摩大士であるとしていることなどが挙げられる。

第二章 随葬衣物疏に現れた仏教語

(1) 郗超と「奉法要」

随葬衣物疏に見られる仏教語、ないしはそこに盛り込まれた仏教的な実践と倫理、と極めて近い内容を持ち、したがって衣物疏を検討する上で最も有用な文献が、東晋の人、郗超が著した「奉法要」（『弘明集』卷十三所収）である。本章では、この「奉法要」を手がかりに、随葬衣物疏の仏教語について考察する。

郗超（三三六～三七七）は、字を景興・嘉賓といい、東晋の司空・太尉となった郗鑒を祖父にもつ東晋の名族

の一員で、熱心な仏教信者であったことが『晋書』卷六十七本伝その他に見えている。その著作である「奉法要」は、中国の士大夫によって書かれた、現存する最古の仏教概論であり、中国仏教史上もしくは中国思想史上、特異な地位を占めている、と評価されている。⁽⁸⁾『弘明集研究』⁽⁹⁾に収められた訳注では、「奉法要」全体を二十四節に分け、それぞれに表題をつけているので、まずその表題を列挙して「奉法要」の概要を示すことにする。

仏教信仰の要義〔奉法要〕

一、三宝への帰依

二、五戒

三、歳の三齋と月の六齋

四、六種の思念について

五、十善について

六、三界と五道

七、五陰

八、五蓋

九、六情〔六衰・六欲〕

十、報応の根本をなす心〔情念〕の動きを慎しむこと

十一、過ちを匿さぬこと

十二、他人の善を称揚せよ

十三、業報の主体は個人である

十四、報応を祖先と子孫の間で考えるのは、聖人の方便の教である

十五、報応の道理が三世を貫く必然性について

十六、日常生活における仏法の実践

十七、四等について

十八、涅槃への道としての無心〔忘心〕

十九、教の必要性

二十、一切苦の超克

二十一、四非常

二十二、六度〔六波羅蜜〕

二十三、罪福報応と涅槃

二十四、空と実践（空の中で空を行ずることについて）

一見して明らかなように、「奉法要」には、五戒（二）、歳の三斎と月の六斎（三）、十善（五）、五道（六）など、衣物疏に見えている仏教語の多くが登場する。また、これらの仏教語がいずれも、「奉法要」全体の中で最初の方に集中していることにも気づく。

「奉法要」は仏教概論であると述べたが、その性格は理論の書というよりは実践の書であり、仏教を信仰する生活への手引きとでも言うべきものである。したがって、その記述は仏教の入口から深奥へと進むように配列されている。随葬衣物疏の仏教語が「奉法要」の最初の方に集中していることは、これらの語がいわば「初心者向き」の内容のものであったことを示している。

では、個々の語の意味について、「奉法要」の記述を確認していこう。

(2)五戒

「奉法要」は、五戒について次のように述べている。

一者不殺。不得教人殺。二者不盜。不得教人盜。三者不婬。不得教人婬。四者不欺。不得教人欺。五者不飲酒。不得以酒為惠施。

一は、殺さず。人をして殺さしむるを得ず。二は、盗まず。人をして盗ましむるを得ず。三は、婬せず。人をして婬せしむるを得ず。四は、欺かず。人をして欺かしむるを得ず。五は、酒を飲まず。酒を以て惠施を為すを得ず。

この五項目が、重いものから順に配列してあることは明らかであろう。その中で、最後に挙げられた飲酒の禁止を他の四項目と同列に扱うことについては、厳しすぎると思う向きもあるかもしれない。酈超にもそのような懸念があったのか、飲酒については特に次のような補足を加えている。

若以酒為藥、當權其輕重、要於不可致醉。醉有三十六失、經教以為深誠。

若し酒を以て薬と為さば、当に其の軽重を権り、酔いを致す可からざるを要すべし。酔いに三十六の失あり、
經教以て深き誠しめと為す。

有名な「酒は百薬の長」という言葉がすでに『漢書』（食貨志）に見えているから、酒は薬であるという意識は以前から存在したのであり、飲酒の口実として使われたことも大いに考えられる。郁超はそれを利用して、薬として飲むのは許容する、ただし酔ってはいけない、と戒めて、受容されやすいよう配慮したものと思われる。「奉法要」は五戒についての記述を

不殺則長寿、不盜則常泰、不婬則清淨、不欺則人常敬信、不醉則神理明治。

殺さざれば則ち長寿なり。盜まざれば則ち常に泰らかなり。婬せざれば則ち清淨なり。欺かざれば則ち人常に敬信す。酔わざれば則ち神理明らかに治まる。

と結ぶが、他の四項目と違って、「不飲酒」ではなく「不酔」としているところにも、その配慮がうかがえる。

(3) 十善

十善について「奉法要」は次のように規定している。

十善者、身不犯殺盜婬、意不嫉恚癡、口不妄言綺語兩舌惡口。

十善者、身に殺・盜・婬を犯さず、意に嫉・恚・癡をせず、口に妄言・綺語・兩舌・惡口をせざる（をいう）。

最初の三項目は、五戒のそれと順序も含めて全く一致する。また五戒の「欺」は、十善の「妄言・綺語・兩舌」

と重なる部分が多い。これは、五戒と十善が本来別々に形成され、後に一對のもののように扱われるようになったものであることを推測させる。そしてこの両語が、【衣三】の「持仏五戒、専修十善」や、【衣六】の「十善持心、五戒堅志」のように、漢文特有の対句表現に適したものであることも見逃せない点である。

それにしても、この五戒・十善の内容は、あえて仏教を待たずとも、人間社会にほとんど普遍的とも言える日常的な道徳的・倫理的な規範である。言い換えれば、もし五戒・十善を守れない人間がいたとしたら、それはその人が仏教を篤信していないからではなく、生活態度が放縦であるためである、と言つてよい。随葬衣物疏に言う五戒・十善の堅持は、きちんとした生活を送っているものにとつては、さほど困難なことではなかったであろう。

(4) 五道

「奉法要」に言う。

三界之内、凡有五道。一曰天、二曰人、三曰畜生、四曰餓鬼、五曰地獄。

三界の内、凡そ五道あり。一を天といい、二を人といい、三を畜生といい、四を餓鬼といい、五を地獄という。

現在の私たちにとつては六道の方が馴染みのある語であるが、当時の中国では修羅道を含まない五道の方が一般的であつたことがわかる。「奉法要」はこれに続けて、最上の天に輪廻するには、

全五戒則人相備、具十善則生天堂。

五戒を全うすれば則ち人相い備わり、十善を具うれば則ち天堂に生まる。

と、五戒・十善をきちんと守ることが大切である、と述べている。ここでは、五道の輪廻が五戒と十善を堅持させる役割を担っていることがわかる。

(5) 歳三月六の齋

「奉法要」に言う。

已行五戒、便修歳三月六齋。歳三齋者、正月一日至十五日、五月一日至十五日、九月一日至十五日。月六齋者、月八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日。

すでに五戒を行なえば、すなわち歳三月六の齋を修む。歳三の齋は、正月一日より十五日に至り、五月一日より十五日に至り、九月一日より十五日に至る。月六の齋は、月々の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日なり。

これに続く部分には齋の内容が述べられている。それによると、齋の期間には仏道に帰依した生活を送ることはもちろん、生活上の制約として、食事についての禁忌のほか、閨房から遠ざかること、牛車・馬車に乗らぬこと、武器を手にしたくないこと、女性化粧を控えること、などが規定されている。

五戒と十善に比べ、日常生活上の制約が加わり、厳しい内容である。この「歳三月六の齋」が、山東省出土の【衣六】には現れるが、トルファン出土の【衣三】には現れないことは、両地域の仏教信仰の相違を反映しているのかもしれない。

(6) 中国撰述經典

以上、「奉法要」を手がかりとして随葬衣物疏の仏教語を検討してきたが、仏教文献中には他にも類似した内容をもつものがある。それは中国で撰述された經典であって、『梵網經』・『灌頂經』・『提謂波利經』などが該当する。前二者については旧稿でも言及したので、ここでは『提謂波利經』（逸文）を引用する。⁽¹⁰⁾

まず五戒・十善と五道については、

仏言、持五戒為人、行十善生天、不償作畜生、慳貪作餓鬼、破戒入地獄、是五道之行。

仏言えらく、五戒を持せば人となり、十善を行なえば天に生まれ、償わざれば畜生となり、慳貪なれば餓鬼となり、戒を破れば地獄に入る。是れ五道の行なり。

（『法華玄義私記』卷十）

とあり、また「歳三月六の齋」については、

提謂長者白仏言、世尊、歳三齋皆有所因、何以正用正月・五月・九月。六日齋、用月八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日。

提謂長者、仏に白して言えらく、世尊、歳三の齋は皆な因るところ有らん。何を以て正に正月・五月・九月を用いん。六日の齋は、月の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日を用いん。

（『法苑珠林』卷八十八）

とあって、随葬衣物疏と共通の主題が取り上げられていることがわかる。

『提謂波利經』は四六〇年ごろ、北魏の都、平城（山西省大同市）で曇暍という僧が撰述したもので、太武帝による仏教弾圧の後、仏教の復興を図るため、庶民の教化を目的として作られたものである。したがって、ほぼ

同時期の随葬衣物疏に共通の内容が見られることはごく自然なことなのであるが、葬送儀礼という習俗の中にまで浸透していたことが確認できる点は重要である。

第三章 随葬衣物疏の諸表現

(1) 醉酒

【衣四】・【衣五】に「醉酒（酒に酔う）」という語が出てくる。この語については旧稿で、江蘇省蘇州市五龍山の東晋墓から出土した墓券（庚寅年。三九〇年⁽¹⁾）に「醉酒命終（酒に酔いて命終わる）」という一節があることから、現実の死因を示すものではなく、臨終の状況を形容する慣用的な表現で、「安らかに」「眠るように」という意味であろうと推定したが、他の墓券にも数例同様の用例があることが判明したので、ここに関係部分を抄出して示す。なお、墓券の积文は前掲の魯西奇『中国古代買地券研究』により、同書での掲載箇所を（魯 何頁）のように示した。

【墓一】劉宋 元嘉十年（四三三） 徐副墓券（抄出）（魯 一一〇頁）

荊州長沙郡臨湘縣北鄉白石里界官祭酒代元治黃書契令徐副、年五十九歲、以去壬申年十二月廿六日、醉酒壽終、神歸三天、身歸三泉、長安蒿里。

荊州長沙郡臨湘縣北鄉白石里的界官祭酒・代元治黃書契令徐副、年五十九歲、去壬申の年十二月廿六日を以て

醉酒し寿終わり、神は三天に帰し、身は帰三泉に帰し、^{とこし}長えに蒿里に安んず。

【墓二】劉宋 元嘉十六年（四三九） 蘭謙墓券（抄出）〈魯 一一三頁〉

武昌郡〔武〕昌県東郷新平里男□蘭謙、年六十五歳、以今己卯歳二月九日巳時、醉酒命〔終〕。

武昌郡〔武〕昌県東郷新平里の男□蘭謙、年六十五歳、今己卯歳二月九日巳時を以て、醉酒し命〔終わる〕。

【墓三】劉宋 元嘉二十一年（四四四） 田和墓券（抄出）〈魯 一一九頁〉

始興郡曲江県□郷太平里田□□□、以去元嘉廿年十一月廿六日、平、醉命終、神帰三天、身帰三泉、長安蒿里。

始興郡曲江県□郷太平里の田□□□、去る元嘉廿年十一月廿六日、平らかに、酔いて命終わり、神は三天に帰し、身は三泉に帰し、^{とこし}長えに蒿里に安んず。

【墓四】梁 天監十五年（五一六） 熊薇墓券（抄出）〈魯 一二八頁〉

始安郡始安県都郷牛馬王曆里女民熊薇、以癸巳年閏月五日醉酒命終、当帰蒿里。

始安郡始安県都郷牛馬王曆里の女民熊薇、癸巳年閏月五日を以て醉酒し命終わり、当に蒿里に帰すべし。

【墓五】梁 中大通五年（五三三） 周当易墓券（抄出）〈魯 一三四頁〉

象郡新安県都郷治下里没故女民周当易、醉酒命終、今帰里豪。

象郡新安県都郷治下里没故女民周当易、醉酒し命終わり、今里豪に帰す。

【墓五】の最後に見える「里豪」は、「豪里」と書くべきところを誤倒したもの。豪は蒿と音通で、つまり「里豪に帰す」は「蒿里に帰す」と同じである。蒿里は死者の里である。

以上の諸例から、「醉酒」は四世紀中ごろから六世紀前半にかけて、長江流域で使用された、臨終の状況を形容する慣用的な表現であることが判明する。

ところで、先に挙げた酈超の「奉法要」は、まさにこの時代、この地域で著されたものである。酈超が飲酒を禁じ、薬として飲むならよいがその場合でも酔ってはいけない、と戒めたその同じ社会で、一方ではこのような慣用表現が行なわれていたことは、興味深いところである。

(2) 仏と花を取る

【衣六】に「今、戒師・藏公・山公等の使する所と為り、仏と花を取り、往きて返らず」という一節がある。旧稿ではこの一文を難解とし、被葬者が「神仙たちの働きかけによって冥界へ向かい、二度と戻らない」というような意味ではないかという推測を記しておいた。その後、墓券の中に比較可能と思われる表現をもつものがあることが判明したので、ここで検討を加えることとする。その表現とは、結論を先に言えば、「(被葬者が)花や薬を取りに行き、そこで仙人に出会って酒を振る舞われ、道に迷って帰れなくなった」というものである。以下、

比較的類似したものごとくにまとめて紹介していく。

まず、【衣六】と同じように、花を取りに行つて帰らなかった、という例がある。

【墓六】 宋 開宝七年（九七四）王二娘墓券（抄出）〈魯 三四三頁〉

今有江南西道吉州廬陵縣宣化鄉崇仁里梅溜村歿故亡人王氏夫人、行年八十三歳、因向後園採花、路逢仙人賜酒、因此迷而不返。

今、江南西道吉州廬陵縣宣化鄉崇仁里梅溜村の歿故せる亡人王氏の夫人有り、行年八十三歳、後園に向かいて花を採り、路に仙人に逢いて酒を賜るに因り、此れに因り迷いて返らず。

【墓七】 宋 大中祥符四年（一〇二一）李大郎墓券（抄出）〈魯 三四八頁〉

維大宋国江南道饒州安仁県坊市歿故亡李大郎、行年六十五歳、暫往南山看花、遇見仙人、賜酒一盃、迷而不返、命入黄泉。

維れ大宋国江南道饒州安仁県坊市の歿故せる亡き李大郎、行年六十五歳、暫く南山に往きて花を看るに、仙人に遇い見えて酒一盃^{まみ}を賜り、迷いて返らず、命は黄泉に入る。

【墓八】 宋 康定元年（一〇四〇）戴十娘墓券（抄出）〈魯 三五〇頁〉

臨江軍峽江玉笥鄉和平里館頭橋北路四保、歿□□□戴氏十娘、行年六十九歳、因向後園翫□□遇仙人賜酒、香魂

迷而不返。

臨江軍峽江玉筍鄉和平里館頭橋北路四保の歿^死園^墓因戴氏十娘、行年六十九歳、後園に向かいて^花を翫^めづるに、^路に仙人に遇いて酒を賜るに因り、香魂迷いて返らず。

若干の欠字があるが、その部分は類似の墓券の文により推定して補つてみた。「翫」の次の欠字部分には「花」を補つたが、これは、賞翫する対象としては、次に出てくる「葉」よりも「花」の方がふさわしいであろうと考えたからである。なお、最後の香魂は麗しい人の魂の意であり、また花の精を言うこともある。あるいは女性の墓券に特有の表現であるかもしれない。

【墓九】 宋 宣和五年（一一一三） 沈九郎墓券（抄出）（魯 三七一頁）

江南西道臨江軍新淦県文昌坊建興寺前街南歿故亡人沈九郎、諱祥、行年四十七、因向後山採花、路逢仙人賜酒、迷而不返□郷。

江南西道臨江軍新淦県文昌坊建興寺前街南の歿故せる亡人沈九郎、諱祥、行年四十七、後山に向かいて花を採るに、路に仙人に逢いて酒を賜るに因り、迷いて□郷に返らず。

次に、花ではなく葉を取りに行つた例がある。

【墓十】 唐 開成二年（八三七） 姚仲然墓券（抄出）（魯 一九五頁）

信州弋陽県新政軍如里姚仲然、年七十七、開成二年九月廿日、因往南山採藥、遇仙不回、遂即致死。

信州弋陽県新政軍如里的姚仲然、年七十七、開成二年九月廿日、南山に往きて藥を採るに、仙に遇いて回らざるに因り、遂に即ち死を致す。

【墓十一】 宋 元符二年（一〇九九）張愈墓券（抄出）〈魯 三六二頁〉

江州彭沢県五柳西域里、張君諱愈、享年七十□歲、因往南山採藥、遇見仙人飲酒、蒙賜一杯、至今酩酊不回。
江州彭沢県五柳西域里、張君諱愈、享年七十□歲、南山に往きて藥を採るに、仙人の酒を飲むに遇い見え、蒙りて一杯を賜るに因り、今に至るも酩酊して回らず。

【墓十二】 宋 政和八年（一一一八）李九郎墓券（抄出）〈魯 三六五頁〉

故歲承事李九郎、因南山採藥、遇見仙人飲酒、蒙賜一盃、醉落迷魂不返。

故歲承事李九郎、南山に藥を採るに、仙人の酒を飲むに遇い見え、蒙りて一盃を賜るに因り、醉落迷魂して返らず。

そのほかにも、花も藥も出てこないが、仙人に出会って酒を振る舞われたとされる例がある。

【墓十三】 宋 至道元年（九九五）彭司空墓券（抄出）〈魯 三四七頁〉

大宋国江南西道吉州□陵県宣化郷北洲団、有没故亡人彭司空……行年六十五歳、忽被太山所召、路逢仙人賜酒、因醉迷而不返。

大宋国江南西道吉州□陵県宣化郷北洲団に、没故せる亡人彭司空有り、……行年六十五歳、忽ち太山の召す所をこうむり、路に仙人に逢いて酒を賜るに因り、醉迷して返らず。

この墓券では「太山（泰山）に召された」という部分が注意される。【衣六】には被葬者を促す主体として「戒師・藏公・山公」などの神仙と思われる存在が登場するが、太山はそれと同じ役割を果たしていると思われることができそうである。

【墓十四】 宋 元豊八年（一〇八五）蔡八郎墓券（抄出）〈魯 三六〇頁〉

南贍部州大宋国江州德化県甘泉郷高平社西山保、歿故亡人蔡八郎、甲子年生、陸拾貳歳、不幸命終、元豊八年十月廿三日甲申身亡、仙人飲酒、命歸蒿里、安葬。

南贍部州大宋国江州德化県甘泉郷高平社西山保、歿故せる亡人蔡八郎、甲子年生、陸拾貳歳、不幸にして命終わる。元豊八年十月廿三日甲申に身亡くなり、仙人飲酒せしめ、命は蒿里に歸し、安らかに葬らる。

【墓十五】 宋 宣和三年（一一二二）張公墓券（抄出）〈魯 三七〇頁〉

大宋国江南道饒州德興県銀山郷……歿故中書舍人張公、行年四十三年……忽因冥游、遇□□□、飲西王母壺中美酒、乗醉不返。

大宋国江南道饒州德興県銀山郷……歿故せる中書舎人張公、行年四十三年……忽ち冥游し、圃人に遇い園え、西王母の壺中の美酒を飲むに困り、酔いに乗じて返らず。

欠字部分は類似の墓券の文により補ってみた。

さて、以上は内容の類似したものとまとめて示したのであるが、今度は、これらを時系列に配列し直し、それぞれに含まれている要素を抽出してみよう。最初の王江妃は随葬衣物疏、それ以外は墓券であり、各行冒頭の数字は西暦である。

五七三	北齊武平四年	王江妃	花	仏	戒師・蔵公・山公
八三七	唐 開成二年	姚仲然	南山	薬 仙	
九七四	宋 開宝七年	王二娘	後園	花 仙人	
九九五	至道元年	彭司空		仙人 酒	
一〇一一	大中祥符四年	李大郎	南山	花 仙人	太山
一〇四〇	康定元年	戴十娘	後園	<u>圃</u> 仙人 酒	
一〇八五	元豐八年	蔡八郎		仙人 酒	
一〇九九	元符二年	張愈	南山	薬 仙人 酒	
一一一八	政和八年	李九郎	南山	薬 仙人 酒	

一一二一	宣和三年	張公	酒
一一二三	宣和五年	沈九郎	後山
		花	仙人
		酒	

戴十娘墓券と張公墓券にはともに欠字があり、欠字部分にそれぞれ花と仙人が含まれている可能性が大きいので、右のように示した。

以上より、唐代後期～宋代の墓券には「(被葬者が)花や薬を取りに行き、そこで仙人に出会って酒を振る舞われ、道に迷って帰れなくなった」という、逝去を表す比喩的な表現が用いられたことが知られる。(北斉の【衣六】と唐の【墓十】には酒が登場しないが、この二例だけで「酒が登場するのは宋代からである」と断定するのはためらわれる。)魯西奇氏は【墓十】の解説において、唐の康駢の『劇談録』を引き、このような「採薬遇仙」の説が唐の長慶年間(八二二～八二四)に起源することを述べているが、【衣六】の「仏と花を取り、往きて帰らず」はその先駆とも言うべき表現であり、淵源がさらに古く遡ることを示すものである。

また、仏教との関連で言えば、【衣六】の仏は、墓券文の中で仙人が果たすのと似た役割を果たしている(ただし酒を振る舞いはしない)点が注意される。

(3) 書ける者と読める者

【衣四】に「東海童子書く」とあり、【衣六】に「書けるは観世音、読めるは維摩大士なり」とあるように、随葬衣物疏には書き手や読み手が記される場合がある。同様に、墓券にも作り手・書き手・読み手などを記すもの

がある。その数は非常に多いので、ここでは代表的なものを選んで例示する。

【墓十六】唐 開成二年（八三七）姚仲然墓券（抄出）〈魯 一九五頁〉

何人書。水中魚。何人読。高山鹿。鹿何在。上高山。魚何在。在深泉。

何人の書けるや。水中の魚なり。何人の読めるや。高山の鹿なり。鹿は何くに在りや。高山に上れり。魚は何くに在りや。深き泉に在り。

【墓十七】五代十国時代 吳 武義元年（九一九）随氏娘子墓券（抄出）〈魯 二二三頁〉

若有神来尋問者。誰謂作。天上鶴。誰謂書。水中魚。誰謂読。山中鹿。□□□□、鹿上高山、魚入深泉。

若し神の来りて尋問する有ら者^ば。誰か作ると謂わん。天上の鶴なり。誰か書くと謂わん。水中の魚なり。誰か読むと謂わん。山中の鹿なり。□□□□、鹿は高山に上り、魚は深泉に入る。

欠字部分は、類似の例から推測して、鶴飛上天（鶴は上天に飛び）である可能性が大きい。

【墓十八】宋 大中祥符四年（一〇一一）李大郎墓券（抄出）〈魯 三四八頁〉

誰為書。水中魚。誰為作。天上鶴。鶴何在。飛上天。魚何在。入深泉。若要相尋覓、但来東海辺。

誰か書を為せるか。水中の魚なり。誰か作を為せるか。天上の鶴なり。鶴は何くに在りや。上天に飛べり。魚は何くに在りや。深泉に入れり。若し相い尋覓するを要すれば、但だ東海の辺に來たれ。

【墓十九】 唐末 漳州漳浦県陳氏墓券（抄出）（魯 二〇八頁）

何人書。星与月。何人見。竹与木。星月歸于天、竹木歸于土。

何人の書けるや。星と月なり。何人の見るや。竹と木なり。星・月は天に歸し、竹・木は土に歸す。

ここで「見る」とは、立会人を「時見」と称することから、保証人として契約に立ち会う、という意味であろう。

【墓二十】 後周 顯德二年（九五五）劉某墓券（抄出）（魯 二二二頁）

書券人石公曹、飛上天。読券人金注、入黄泉。

書券人は石公曹、上天に飛べり。読券人は金注、黄泉に入れり。

以上見てきたように、魚・鹿・鶴・星・月・竹・木などが墓券の書き手・読み手、ないしは立会人として登場している。一種の擬人的な表現であるが、何より重要なのは、彼らが人間の世界とは違う異界の住人だという点であろう。彼らは、人間の世界に姿を見せることはあっても、本来は水中・高山・深泉・上天など、人間が行き得ない場所に帰属しているのである。【墓二十】の石公曹と金注も、實在の人物ではなく、しばしば登場する張堅固・李定度と同様、神仙であり、やはり異界の住人であると考えられる。【衣四】で、この随葬衣物疏を書いたのは東海童子であり、書き終えたら海に還っていく、とあるのも同じである。

随葬衣物疏にしても墓券にしても、死者が死後の世界で安寧に暮らすことを願って作成されるものである。死者は、現世の人間の力が及ばない、遠い世界に向かっていく。その彼方の世界での安寧を保障するためには、現

世の人間ではなく、異界の住人の力を借りることが必要になる。当時の人々は以上のように考えて、墓券の効力を保障してくれる存在として、魚・鹿などの異界の住人を登場させたのであろう。

このように考えてくるとき、【衣六】の終わり近くで、書き手として観世音が、読み手として維摩大士がそれぞれ登場するのは、観音・維摩が、単に人間の世界のみならず、遠く死者の世界にも力を及ぼし得る存在だとして、当時の人々に認識されていたことを物語っているのである。

第四章 仏教語をもつ墓券

「はじめに」で述べたように、これまで筆者が仏教的要素をもたないと述べてきた墓券の中に、仏教語をもつものがあることが判明した。そこで、最終章ではこの点について、初步的な考察を行なうことにする。

まず、問題の墓券の全文を示す。前章で【墓十九】として部分的に引用したものと同じであるが、今度は全文なので、改行は原史料の通りである。

【墓二十一】唐末 漳州漳浦県陳氏墓券（全文）（魯 二〇八頁）

□訶世界南瞻部洲大唐国福建

道管内漳浦県嘉嶺郷□

恵里□□保、没故□□陳氏林宅兆

□□□月□□除向陽、当

帰呵里、有冥錢万一千貫文、就地主

張堅固・李亭度、□收買□艮山

罌地一片、東至王公、西至王母、南瞻

部洲北鬱越单為界。亡人收領永

為冢宅。何人書。星与月。何人見。

竹与木。星月帰于天、竹木帰于

土。急急如律令。

摩訶世界・南瞻部洲・大唐国福建道管内漳浦県嘉嶺郷□恵里□□保、没故亡人陳氏、林宅兆□□□月□□□除向陽、当に呵（＝蒿）里に帰すべし。

冥錢万一千貫文にて、地主張堅固・李亭度に就きて、艮山罌地一片を□收買□する有り。

東は王公に至り、西は王母に至り、南は瞻部洲・北は鬱越单を界と為す。

亡人收領し、永^{とし}えに冢宅と為す。

何人の書けるや。星と月なり。何人の見るや。竹と木なり。星と月は天に帰し、竹と木は土に帰す。

急急如律令。

冒頭の「□訶世界南瞻部洲」と、七〜八行目（原文）の「南瞻部洲、北鬱越単」が仏教語である。「北鬱越単」は正しくは「北鬱単越」であり、誤倒と見られる。これは須弥山の周囲にある四洲のうち、南と北とに存在する洲の名称である。『大唐西域記』卷一に、

海中可居者、大略有四洲焉。東毘提訶洲、南瞻部洲、西瞿陀尼洲、北拘盧洲。

海中の居る可き者、大略四洲有り。東は毘提訶洲、南は瞻部洲、西は瞿陀尼洲、北は拘盧洲なり。とあり、さらに北の拘盧洲に注して

旧曰鬱単越。

旧に鬱単越という。

とある通りである。

では、この二つの仏教語は募券全体の中でどのような役割を果たしているのだろうか。ここで、この募券全体の構成を見るため、内容を整理して箇条書きにしてみよう。

- ① 逝去の事実。逝去者の本貫地（ないし居住地）、名前、日付、逝去
- ② 土地の購入。購入価格、購入先（売主）
- ③ 購入した土地の範囲（四至）。
- ④ 購入の確定。
- ⑤ 契約書の作成者と立会人。
- ⑥ 呪文。

この内容は、ごく一般的な買地券、土地売買文書形式の墓券、そのものである。仏教語は、本貫地の箇所と、購入した土地の範囲を示す箇所とに出てくるが、特に須弥山を中心とする仏教的な世界観が反映されているわけではない。「東は王公に至り、西は王母に至り、南は贍部洲・北は鬱単越を界と為す」という表現には、東王公・西王母という道教的表現と、南贍部洲・北鬱単越という仏教的表現とが半分ずつ登場し、仏・道混淆の様相を呈している。この墓券に見られるのは、「基本的な枠組みはそのまま、その中に仏教的要素が入り込んでいる」という、随葬衣物疏の場合と同様の姿である。

これ以後の墓券を見ていくと、南贍部洲も北鬱単越も四至の記載から姿を消し、本貫地を示す部分の冒頭に南贍部洲だけが現れる。

【墓二十二】 宋 至道元年（九九五） 彭司空墓券（抄出）〈魯 三四七頁〉

維至道元年歲乙未一月癸……日辛酉、南贍部洲大宋国江南西道吉州廬陵県宣化郷北洲団、有没故亡人彭司空。

維れ至道元年歲乙未一月癸……日辛酉、南贍部洲大宋国江南西道吉州廬陵県宣化郷北洲団に没故せる亡人彭司空有り。

【墓二十三】 宋 熙寧八年（一〇七五） 江注府君墓券（抄出）〈魯 三五八頁〉

維南贍部洲大宋国吉州廬陵県城外雍和亡万歳巷歿故承奉郎守秘書丞江府君。

維れ南贍部洲大宋国吉州廬陵県城外雍和坊万歳巷の歿故せる承奉郎・守秘書丞江府君。

【墓二十四】宋 元豊八年（一〇八五）蔡八郎墓券（抄出）〈魯 三六〇頁〉

南贍部州大宋国江州德化县甘泉郷高平社西山保歿故亡人蔡八郎。

南贍部州大宋国江州德化县甘泉郷高平社西山保の歿故せる亡人蔡八郎。

【墓二十五】宋 崇寧四年（一一一五）李宣義墓券（抄出）〈魯 三六二頁〉

南贍部州大宋国江南西路洪州武寧県年豊郷石門里知筠州上高県事李宣義。

南贍部州大宋国江南西路洪州武寧県年豊郷石門里の知筠州上高県事李宣義。

なぜ唐末になって墓券の中に仏教語が現れるのか、なぜ冒頭の南贍部州だけが残って四至の記載からは南贍部洲も北鬱単越も消えてしまうのか、正直言つてわからないことばかりである。今後は、仏教語をもつ墓券がどの地域から出土しているのか、地域の特性なども考慮していかなければならないであろう。また仏教語といつても、今のところ登場するのは南贍部洲・北鬱単越という地名のみである。この両語の用例は、『景德伝灯録』・『続伝灯録』のほか、禅の語録などに多く見られるが、出典の性格についても検討していく必要があるかもしれない。ひとまず初步的な考察の結果を記し、後考を待つこととしたい。

おわりに

本稿の主題は、随葬衣物疏の用語と表現を、仏教文献や墓券との比較を通じて検討することであった。まず仏教語を手がかりとして検討した結果、その内容は郁超の「奉法要」や中国撰述經典に述べられているところと類似し、「漢民族の仏教」・「中国的仏教」などと表現される、当時の中国社会に根を下ろしていった仏教が、葬送儀礼という生活習俗の場にまで浸透していた様子を確認することができた。一方、随葬衣物疏には墓券と類似した表現も多く、この角度から検討を加えることにより、難解な表現を解きほぐしたり、特定の時期に行なわれた慣用表現を見いだしたりすることができた。また、このような検討を通じて、仏教・道教という枠組みを超えた、おそらく当時の人々に共有されていた世界観の一端を、具体的にうかがうことができると考える。

随葬衣物疏は出土例が必ずしも多くない上、類型的な表現をとるものも多く、研究上の制約が大きいのであるが、他の史料ではうかがい知れない世界を提示している、貴重な史料であると言つてよい。本稿では扱えなかった問題もまだ多く残されているが、それらの検討は今後の課題としたい。

註

- (1) 浅見直一郎「中国南北朝時代の葬送文書——齊武平四年『王江妃随葬衣物疏』を中心に——」(『古代文化』四二一九〇)。

同「黄泉の土地と冥途への旅——中国の葬送文書に関する一考察——」（『大谷学報』八七—一二〇〇七）。

(2) 中国文物研究所ほか編『吐魯番出土文書』壹 文物出版社 一九九二 八五頁。

(3) 前掲『吐魯番出土文書』壹 二八頁。

(4) 前掲『吐魯番出土文書』壹 三三四頁。

(5) 「長沙北門桂花園発現晋墓」（『文物參考資料』一九五五—一一）。

史樹青「晋周芳命妻潘氏衣物券考釈」（『考古通訊』一九五六—一二）。

(6) 江西省文物考古研究所ほか「南昌火車站東晋墓葬群発掘簡報」（『文物』二〇〇一—一二）。

(7) 『陶斎蔵石記』卷十三。龍潜「掲開《蘭亭序》迷信的外衣」（『文物』一九六五—一〇）。

(8) 福永光司「都超の仏教思想——東晋仏教の一性格——」（『魏晋思想史研究』岩波書店 二〇〇五）。

(9) 京都大学人文科学研究所、一九七三—七五。

(10) 『提謂波利經』については次の二論文を参照。

塚本善隆「中国の在家仏教特に庶民仏教の一經典——提謂波利經の歴史——」（『塚本善隆著作集』第二卷 大東出版社 一九七九）。

牧田諦亮「提謂經と分別善惡所起經——真經と偽經——」（『牧田諦亮著作集』第一卷 臨川書店 二〇一四）。なお、『提謂波利經』は敦煌文献（ペリオ文献）中に存在するが、若干の文字の異同があり、ここでの引用は逸文によった。

(11) 錢鏞「蘇州市五龍山発現晋代墓葬」（『文物』一九五九—一二）。